

ステレオタイプ化される女子中高生の恋愛経験・性愛経験

— 1988 年～1997 年『SEVENTEEN』「女の告白書」分析 —

The Stereotyped Image of Romantic Relationship and Sexual Intercourse by Female
Junior and Senior High School Students

— An Analysis of Magazine Articles from the Japanese

Seventeen (teen magazine) Published between 1988 and 1997 —

桑原 桃音*

Momone Kuwabara

本稿は、ハイティーンの女性向け雑誌『SEVENTEEN』にて、1988 年から 1997 年まで特集されていた読者調査記事を分析資料とし、そこで形成される女子中高生の恋愛経験と性愛経験のあり方を検討する。その結果、記事では恋愛が日常に不可欠な女子中高生像が、異性と交際をするなかで適当なタイミングで、適齢で、段階的に性愛経験を経るプロセスがステレオタイプとして提示されていることを明らかにした。

キーワード：女子中高生、恋愛、セクシュアリティ、恋愛の社会学、ティーンズ誌

I. 問題設定

本稿の目的は、1968 年 5 月に創刊された女性向けティーンズ誌『SEVENTEEN』（集英社）の、1988 年から 1997 年の 10 年間に於ける読者の語りを分析することにより、そこで形成されていた女子中高生の恋愛経験と性愛経験の理想的なあり方を浮き彫りにすることである。

1950 年に 42.5%であった高等学校への進学率は、1974 年には 90%を超え、1990 年代はほぼ 100%となった（総務省統計局 2006）。15 歳から 18 歳の女性の進路は、1950 年代までは進学と就職とにわかれていたのが、1970 年代以降になると、この世代のほとんどの女性が女子高校生となったわけである。小山（2014）によると、戦後数年間は男女共学化によって思春期の子どもたちが日常的に接触するようになることで、学校教育の課題として男女交際、純潔教育をめぐる議論が祖上にあがっており、この「純潔教育」によって「節度ある」「正しい」男女交際が可能であると主張されていた（小山 2014：32-33）。思春期の子どもたちのほとんどが学校で異性と接触するようになる 1970 年代以降も、学校教育は高校生がキスや性交をするような性愛関係を「正しい」異性

愛関係と位置づけることはなかった。

しかしながら、1980年代後半から1990年代にかけて女子高校生のキスや性交などの性愛経験率は上昇した。キスは1987年の25.5%が1999年になると42.9%に、性交は1987年の8.8%が1999年になると23.7%となっていた。ただし、中学生の性交経験率は1987年の1.8%から1999年の3.0%にとどまっている（日本性教育協会 2007：13）。

それでは、1980年代から1990年代の女子中高生たちは、学校が教えない恋愛経験、性愛経験のあり方、その経験にいたるまでの異性との関係の築き方に関わる情報をどこで得ていたのであろうか。彼女らに「正しい」異性愛のあり方を示していた情報源のひとつとして、女子中高生を読者対象とした女性向けティーンズ誌をあげることができる。女性向けティーンズ誌は商業メディアでもあるため、部数を伸ばすために女子中高生の興味をひかなければならない。しかし、公共メディアでもあるため、性的に逸脱した女子中高生の異性愛のあり方を提示しすぎてはいけない。

思春期の子どもたちのほとんどが共学の学校へ進学し、女子高校生の性愛経験率が上がる1980年代後半から1990年代において、上記のような特質をもつ女性向けティーンズ誌は、読者である女子中高生の恋愛経験、性愛経験のあり方をいかに表象してきたのだろうか。

これまで、戦後日本における女性雑誌を分析した研究は、私的なこととされる「正しい」異性愛関係のあり方、その関係性に付随するジェンダー、セクシュアリティをメディアがいかにして提示してきたのかを明らかにしてきた（赤川 1999；諸橋 2001；谷本 2008；米澤 2010；北原 2011）。谷本（2008）は恋愛を社会的に分析する意義を指摘したうえで、男性誌と女性誌における恋愛言説の特徴を分析し、「重大な分岐点」であるからこそ結婚、別れが延期されたり、曖昧にされたりするような言説が登場していたことを明らかにした。本稿も谷本（2008）と同様に恋愛を社会的に分析することに意義があるという立場に立つ。しかしながら、これまでの女性雑誌研究においてティーンズ誌は分析対象から外されており、戦後の女子中高生の恋愛経験と性愛経験の表象については明らかにされてなかった。

最近になって、小山らが著した『セクシュアリティの戦後史』（2014）¹⁾において、戦後の中高生に提示されていた「恋愛」、「正しい」異性愛関係のあり方が明らかになりつつある。今田（2014）は中高生に向けてつくられた少女雑誌『女学生の友』（小学館）の1950年から1962年の特集記事と座談会記事を分析している。この少女雑誌が提示した「正しい男女交際」とは「明るい男女交際」であり、その交際とは第一にグループでつきあうこと、第二に両親の許可を得てつきあうことであったという²⁾（今田 2014：68-70）。

それでは、男女共学化後、高等学校への進学が定着し、「マニュアル化された知識＝『正しい』異性愛の物語」（赤枝・今田 2014：333）がより一層大量に流布されていた1970年代から1990年代に、女子中高生に向けられた知識はいかなるものだったのか。トジラカーン・マシマ（2014）

は中高生向けの少女マンガ雑誌『少女コミック』（小学館）の性描写が1970年代から1980年代においていかにして定着していたのかを分析している。マシマによると1983年以降に「性に対して好奇心を持ち」、「試行錯誤した末に」やがて「初体験」を経て「幸せなセックス」を経験するヒロインが登場していた（マシマ 2014：280-283）。桑原（2014）は『SEVENTEEN』の1970年代から1990年代の恋愛に関わる記事における「キスやセックスなどの表象を分析し、女子中高生の性が語られる場で形成される性行動のあり方や規範、セクシュアリティを浮き彫りに」している（桑原 2014：245-246）。『SEVENTEEN』において時代を通して常に描かれていたのは、愛の具体化としての性行動と、そこに伴う身体的リスクとの間をゆれ動く女子中高生の姿であり、初体験への欲望を喚起しながらも初体験のリスクを常に念頭に置いて「愛のある」性的関係を築かせようとするイデオロギーであった³⁾（桑原 2014）。

『セクシュアリティの戦後史』（2014）は、正しい異性愛関係のあり方、異性と関係をもつことが「自然」だということが、社会によって形成され、それらが私たちの考え方や行動を規定していることを、つまり「正しい異性愛関係」がく創られた自然>であることを示そうとしている。この問題提起を本稿も引き継ぎながら、次のような残された課題を明らかにしていく。

女子高生の性交経験率が上昇する1980年代後半から1990年代において、女性向けティーンズ誌が恋愛経験、性愛経験のあり方をいかに表象してきたのかを明らかにし、さらに「正しい」異性愛関係の脱自然化をするためには、キスやセックスだけに限定せずに、男女交際のあり方のより詳細で具体的な分析が必要である。しかしながら、今田（2014）が男女交際に着目しているのに対し、桑原（2014）とマシマ（2014）はともに、キスやセックスなど性行為の意味づけに焦点を置き、性的関係にいたるまでにどのように男女交際をするべきとされていたのかは、性行為に付随する文脈だけに限られている。

性行動の理想に焦点が置かれると、女子中高生に対して提示される出会い、交際から性関係にいたるまでの理想的なプロセス、異性愛に関わる価値規範がいかなるものがわからない。また、桑原（2014）では「『SEVENTEEN』において細かくアドバイスされているのはキスの仕方ぐらいである」（桑原 2014：260）と論じられているが、これはセックスの仕方と比較してであって、男女交際のあり方はキスと同程度に、あるいはそれ以上に詳細に記述されている可能性がある。女子中高生に提示された「正しい異性愛関係」を「脱自然化」するためには、キスやセックスだけに限定せずに、男女交際のあり方のより詳細で具体的な分析によって、異性愛に関わる価値規範の形成を検証することが必要であろう。しかしながら、管見の限り1980年代後半から1990年代の女性向けティーンズ誌における男女交際のあり方と性愛関係のあり方について分析した研究は見当たらない。

そこで、本稿では、ステレオタイプ化される女子中高生の恋愛経験と性愛経験の理想像を次の順序で浮き彫りにしていく。まず、II.では、本稿の目的を遂行するために、『SEVENTEEN』の、

特に 1988 年から 1997 年の「女のコ白書」記事の概要を示しながら、これらの記事を扱う意義と、その分析方法について説明する。そのうえで、Ⅲ.では、記事において、恋愛関係形成から性愛関係の形成過程において、どの段階が主題化されているのかを取り上げる。そして、各主題において提示される恋愛経験と性愛経験のあり方はいかなる内容かを析出し、その構図を描写する。なお、本稿ではキスや性交に関する言説を性愛経験言説として、そこにいたる恋愛プロセスを恋愛経験言説と位置づけて議論していく。最後に、今回の検証から明らかになった点をまとめ、考察を行い、今後の課題を示す。

Ⅱ. 資料と方法

1. 資料 — ステレオタイプ化を可能にする「白書」形式

正しい異性愛関係の理想的なあり方を分析するにあたって『SEVENTEEN』を用いる意義は桑原(2014)に詳しいため、ここでは桑原(2014)での記述を参照、要約しながら、本稿にとっての意義を示す。その意義は第一に、1980年代後半から1990年代にもっとも女子中高生に読まれたティーンズ誌であるため、ほかの雑誌と比べると、そこで提示される異性愛の理想を目にした女子中高生が多かった点である。第二に、この時期の『SEVENTEEN』は女子中高生に対してファッションだけでなくライフスタイルのあり方を提示しており、そこに異性との関係性も含まれていた点である。集英社社史によると、1968年の創刊当時『SEVENTEEN』(当時のロゴは『セブentyーン』)⁴⁾は「愛、友情、ボーイフレンド」の3つのモチーフを掲げた編集方針を打ち出していたが、1987年12月にはファッション中心のグラビア誌への一新をはかり、編集方針を徐々にシフトして「ティーン世代のライフスタイル・マガジン」へと移行させていった(集英社社史編集室 1997: 105-106)。

本稿で取り上げる「女のコ白書」という特集記事は『SEVENTEEN』が「ティーン世代のライフスタイル・マガジン」へと方針をシフトチェンジした後の1988年から1997年の間に毎年、少なくとも年に1回は組まれる特集であった(表1参照、以下、本稿では1988年から1997年の間に読者調査をもとに構成された表1の特集記事を「女のコ白書」と呼ぶ)。この「女のコ白書」が特集される号の表紙には「女のコ5000人大アンケート超特大号」と銘打たれていたことから、この時期の『SEVENTEEN』にとって重要な特集であったことがわかる(1992年4月18日号表紙など)。

1988年から1992年までの「女のコ白書」は全国の『SEVENTEEN』読者を対象に調査票調査をした結果を記事にしたものである。標本はアンケートに答えたい読者が応募し、そのなかから抽出される。抽出の際は、共学と女子校に、居住地域に、対象年齢に偏りがないように人口比率をもとに標本数が調整されている(SVEVENTEEN編集部 1990: 11)。1988年から1989年は3,000人、1990年から1992年は5,000人が選ばれている(『SEVENTEEN』1990年4月18日号: 10-11)。

その後の調査については詳しい標本抽出方法は記載されていないが、1993年の10,000人をピークに、1994年は3,000人、1995年は1,000人、1997年は500人と調査対象者は減少している。桑原（2014）によると、「特集の内容は恋愛、性行動だけでなく、ファッション、美容、好きなタレント、生活、学校などであり、調査結果を円グラフ、ランキングの形式で提示し、さらに自由回答の結果、結果への解説も記述されている」（桑原 2014：258）。

表 1. 1988年～1997年の「女の告白書」特集が組まれた号と特集名

発行年月	特集名	恋愛、性愛について書かれたページ
1988年4月18日号	がんばろーね、新学期ッ!! もっと元気になるための'88年版女の告白書	42-59
1989年4月18日号	みんな元気で、STうれしい。がんばろーね、新学期ッ!! '89女の告白書	26-31
1990年4月18日号	'90 5000人女の告白書	38-45
1991年4月18日号	燃える・躍る・おちゃらける! 新学期のパワードリンク! '91女の告白書	35-51
1992年4月18日号	新学期保存版 かわいさあまって元気100倍! 全国5000人'92女の告白書	53-59, 104-105
1993年4月1日号	日本列島まるごと大アンケート! 乙女ゴコロはこんなに変わった! '93女の告白書	29-35, 72-77
1994年10月1日号	全国3000人大アンケート ザ・みんなの平均値	75, 80-82, 94
1995年7月15日号	日焼けしたいね! 恋もしたいね! 全国1000人アンケート'95夏告白書	78-79, 93-95
1996年6月1日号	共学校 vs 女子校ファッションから男の告白のことまで、こんなに違ってる!! 全国女子高生おしゃれ大調査	16-18, 20-21
1997年12月1日号	読者500人に大調査やっぱみんなフシギに思ってた、ねえデートって、何してんの?	59-65

正しい異性愛関係の理想的なあり方を分析するにあたって「女の告白書」を取り上げる意義は次の通りである。第一に、「女の告白書」では、女子中高生の異性愛のあり方が測定され、異性愛経験だけでなくライフスタイルのあり方が比率や順位によって表出されることで、「普通的女子中高生」像が提示されている点である⁵⁾。異性愛のあり方、知識が提示されることで、ステレオタイプ化された異性愛規範が構築されているのである。「女の告白書」では、「普通は」「みんなは」「多くは」という記述と共に「正しい」異性愛の知識が提示されることによって、異性愛関係のあり方が普遍化、マニュアル化されているのである。それだけでなく、「女の告白書」は女子中高生たちに対して異性愛経験や交際のあり方について、自分は基準から外れているか、特殊な存在か、「一般的」「平均的」な女子中高生かを常に意識させるような、記事のなかの女子中高生と自分を相対化させるような言説装置となっているのである。この言説装置は娯楽の様相を呈しな

がら、または自由な異性愛関係を読者らが経験しているようにみせかけながら、実は「白書」という形式をとることによって、なにが「正常」でなにが「異常」なのかを決定しようとする「規格化」がなされているのだ。「正しい」異性愛の物語がステレオタイプ化されていた1988年から1997年において、いかなる異性愛関係の物語がステレオタイプとして提示されていたのであろうか。

「女の告白書」を取り上げる第二の意義は、「Q&A」方式で異性愛の関係性のあり方が具体的に例示されることで、異性愛に関わる規律や行動様式が構築されているからである。桑原(2014)によると、「女の告白書」では恋愛経験者や性愛経験者の語りQ&A方式で記述されており、「セックスの具体的な技法の記述はないが」、目をつぶるタイミング、キスのときに手はどうするのかなど、キスの仕方の具体的な行動様式が記述されている(桑原2014:259-260)。問いと答えという形式によって、異性との正しい関係を形成するための身ぶり、行動、姿勢などが提示され異性愛関係の作法・規律のテキストとなっているのである。「女の告白書」には出会いのきっかけをどこに求めるか、仲良くなる方法、告白の方法、恋人とのおつきあい方法などが段階的に記述されている可能性がある。そのような恋愛する女子中高生像の綿密な記述は、女子中高生を「正しい」異性愛規範に向かわせる方法、つまり女子中高生のセクシュアリティを管理する方法であるといえる。「女の告白書」では、どのような女子中高生の恋愛、性愛の行動様式が提示されていたのであろうか。

2. 分析手順

分析手順は黒田(1989)と黒田(1990)の「看護婦から見た臨死患者」の分析方法を援用する。これらの研究では、『死の看護事例集』(日本看護協会編さん、1984年)をもとにターミナルケア病棟以外の「一般的な病院の看護婦」にとって「病院における死」のどのような側面が、なぜ「問題」と感じるのかを究明している。そして、その「問題」状況の背景にある「死にゆく人や彼をとりまく人々の抱く人間の死についての理想や期待を自覚化すること」を目指している(黒田1989:66)。分析の結果、死に行く患者に「うそ」を突き通すことができないこと、患者が理想的な死に方ができないという問題状況があり、その背景には患者および、家族は、「看護婦」を援助者・指導者として信頼・依存し、その関係のなか、患者及びその家族が、理想的な死を実現するという「看護婦」にとっての理想があることを明らかにした。

単に「こうありたい」「こうあるべき」という記述を拾い出すことが、事象に対する理想や期待の語りを検証することを可能にするのはもちろんだが、事象に関する「問題」を語ることの背後に理想と期待があることを探り出そうとしている点で黒田(1989,1990)の方法は注目に値する。ただし、黒田(1989,1990)では、その問題設定から「問題」状況のみを扱い、直接的に「看護婦からみて患者が理想的な死に方をしているもの」は除外されている。本稿の問題設定は女子中

高生の異性愛の理想的なあり方を明らかにすることであるため、直接的な理想や期待の語りも含めて分析する。また、ステレオタイプ化、基準化された異性愛のあり方も理想や期待を形成するという本稿の立場から、それらの語りも含めて分析する。

したがって、本稿は「女のコ白書」が提示していた恋愛の理想を明らかにするために、以下のような手順で分析して恋愛経験・性愛経験の理想の構図を描写する。

第一段階では、黒田（1989, 1990）の方法を援用し、以下のような表現があった場合に、それを1988年から1997年の『SEVENTEEN』「女のコ白書」が提示する理想として拾い出す。

- ① 読者が恋愛、性愛に関わるある状況を理想と感じていることが直接的に表現されている場合。（たとえば：「〇〇はこうあるべき」、「〇〇であるほうがよい」、「〇〇だから幸せ」、「〇〇したい」）。
- ② ①のような直接的な記述はないが、読者がある状況を理想と感じていることが前後から判断できる場合。（たとえば：「〇〇はこういうものだろう」）
- ③ ①や②とは逆に、恋愛状況に関して価値剥奪的な表現が直接的にされているばあい。（たとえば：「〇〇であるべきではない」、「〇〇であることは悪い」、「〇〇は嫌だ or 嫌がられる」）
- ④ ある状況における行動の具体的な仕方。（たとえば：「〇〇するにはどうすればいいか」、「効果的な〇〇の仕方」）
- ⑤ ④とは逆に、ある状況において問題に陥った行動の具体的な仕方。（たとえば：「〇〇して失敗した」、「〇〇して拒否された」、「〇〇して失恋した」）
- ⑥ ステレオタイプ化、基準化された異性愛のあり方の直接的な記述。（たとえば：「80%の子が〇〇している」、「みんなは〇〇している」、「フツーのお付き合いは〇〇」、「〇〇するのが普通」、「読者は〇〇している」）

第二段階として、第一段階で析出した恋愛の理想を、恋愛のプロセス順に分けて析出することで恋愛・性愛経験の構図とそこにおける理想と期待を提示する。それは同時に『SEVENTEEN』において主題化されていた恋愛プロセスを明示することにもなる。このプロセスについては、谷本（2008）が若者向け雑誌の恋愛記事を分析した際に用いた「恋愛の社会的物語＝（社会的前提）」の骨格を連鎖的に捉えた《主題的モチーフ》を参考にする⁶⁾。谷本が提示した《主題的モチーフ》のなかでも、「出会い」「魅力（恋人の条件）」「アプローチ」「告白」「デート」「キス」「セックス」「別れや失恋」などである⁷⁾。「女のコ白書」では恋人未満であるが「片思い」をしている状況が《主題的モチーフ》として多く語られる。たとえば、「好きな人はいるか」「それは両思いか、片思いか」「彼氏がいるか」「彼氏は欲しいか」「彼が欲しい理由は」「彼がいない理由は」などの質問が取り上げられる。以下では、谷本（2008）の《主題的モチーフ》に「片思い」を追加して分析する。

なお、「女のコ白書」の記事のなかで、読者調査対象である読者を示す表記が「女のコ」「コ」

と、あるいは記事のなかに登場する恋愛対象の男子学生については「男のコ」となっている場合がある、本稿の文中では記事の表記のニュアンスをそのまま崩さずに記入する際に限って「女のコ」、「コ」、「男のコ」とそのまま記している。

Ⅲ. 分析結果 — 恋愛経験・性愛経験のあり方の構図

1. 出会いから性愛関係への主題化

a. 出会いから交際についての記述

Ⅱ.の分析方法で記事の内容を分析した結果、次のような女子中高生の恋愛経験と性愛経験のあり方をひろいだした。ここでは、恋愛経験、性愛経験をプロセス順にみていこう。これ以降、「女のコ白書」特集記事からの引用の出典を示す際は、表1をもとに特集が掲載された号の出版年と引用ページ数を（西暦：ページ）で記す。

まず、「片思い」「出会い」「魅力（恋人の条件）」「アプローチ」「告白」に関する記述をみる。「片思い」に関する記述の分析結果をまとめると次のようになる。8割前後の「女のコ」は好きな人がいる、もしくは彼氏が欲しいと思っている。しかし、彼氏がいるのは2割程度で、好きな人がいる「女のコ」のほとんどが片思い中である。彼氏がいた経験のないコが半数とされる。彼氏が欲しい理由の上位は「独りじゃさみしい」、「（彼氏がいると）毎日が楽しそう」、「好きな人と両思いになりたい」である。また、彼氏ができない理由の上位は「（片思いの）相手がタレント」とある。（1989：29、1990：39-41、1991：46-48、50、1992：54、1993：30、1994：80-81、1996：16、18）。ここから、『SEVENTEEN』では女子中高生のほとんどが片思い、両思いに限らず恋愛中であることが、そして、読者のほとんどが片思い中で彼氏が欲しいと悩んでいることが「現実」として切り取られていることがわかる。さらに、「好きな人がいない毎日なんてつまらない」（1994：80）という読者の意見や、「みんなの毎日は恋を中心に回っている」（1993：29）という編集者のコメントが記述されていることから、女子中高生の日常に恋愛が不可欠であることが提示されていることがわかる。

「出会い」についてみると、6割近くの「女のコ」は「彼氏と知り合うきっかけ」、もしくは「つきあうきっかけ」を、同じ学校、もしくは以前同じ学校（おそらく中学校や小学校）と回答している。次に多い答えが友だちの紹介である。「ナンパ」による出会いは少数派である。また、1993年以降は、少数派の回答ではあるが出会いは「コンパ」という記述が登場し、1994年の記事では「東京のコ」は「紹介」や「コンパ」で知りあったケースが多かったとある（1988：57、1989：28、1990：40、1991：46、1993：34、1994：81、1996：16、1996：20-21）。

「魅力（恋人の条件）」、理想の「彼氏（彼・カレとも表記される）」像がわかる記述についてみよう。たとえば、『カレ』と『ボーイフレンド』はどうちがうの」という質問への返答は、「彼はずーと一緒にいたいと思える男のコ」、「彼は何でも相談できる人」（1988：56）というものである。

そのほかには、「彼の好きなところ、嫌いなところ」「彼がいてよかったと思うとき」もしくは「幸せと思うとき」に関する質問への返答から、そこで示される理想の彼氏の条件をまとめることができる。その記述をみると、やさしさ、頼りになる、悲しいときや、落ち込んでいるときに励ましてくれる、あるいはなぐさめてくれる人物であることが「彼氏の条件」であることがわかる。また、嫌われる彼氏の条件は、服装が「ダサイ」、やきもちを焼く、「エッチ」、「スケベ」、セックスを求める、ほかの女のコと仲よくしゃべるなどである(1988:56-57、1989:28、1991:47、1992:54)。

「アプローチ」についてみると、「女のコ白書」には、「ほとんど」の女のコがアプローチしたくても緊張して話しかけられないと記載されている(1988:56)。「彼のいるコ」からのアドバイスとして「積極的に話しかける」「素直な気持ちになる」「いつもニコニコ笑顔でいる」などの方法が記述されている(1988:57、1989:29)。「告白」も「アプローチ」と同様に、好きな人がいても6から7割のコが告白できないでいるとされる。「彼のいるコ」からのアドバイスでは勇気を出して積極的に告白すれば彼氏ができると記されている(1990:41)。また、彼氏がいるコのなかで「自分から告白した」経験者は7割であり(1993:31、1994:80)⁸⁾、なおかつ、インタビューした男のコの90%は「デートに女のコから誘ってOK」と答えたとき(1997:63)、女のコからの積極的なアプローチや告白が肯定的に語られている。その一方で、つきあうきっかけとして幸せな状況は相手から告白されることだとも提示される(1991:46)。

「デート」についてみると、第一に、「彼といて『幸せ♡』と思うのはどんなとき」(1989:28)などの質問と回答が彼氏との交際自体の幸福感と優越感を示している。たとえば、「楽しいことは2倍に、悲しいことは半分になる」「学校が楽しくなった」「愛してくれる人がいると思うだけで幸せ」「一緒にいるだけで幸せ」(1992:54)など、回答では彼氏存在自体で得られる幸福感が語られる。そのほかにも、彼氏と軽いスキンシップや手をつなぐときに得る幸福感、友だちに自慢できることやクリスマスに女のコ同士で過ごしていないときの優越感、やさしい言葉や「キレーになった」「大好き」と言われたことへの喜び、困っているときや悩んでいるときに力になってくれる安心感などが語られる(1988:57、1989:28、1991:46、1992:54)。そんな彼からプレゼントされたいものの上位は指輪、花束、アクセサリである(1989:27、1990:39)。

第二に、「デート」そのものについての質問と回答の記述から、「女のコ」たちの普通の、もしくは理想のデートが示される。「デートで連れて行ってほしい場所」についての質問では上位に東京ディズニーランド、遊園地、海などが並び(1989:27、1990:39)、また「デートはどっちから誘う」という質問には男のコから63%であることが記述されている(1997:59)。これらの質問から「デートは男のコに連れて行ってもらうもの」という心性が読みとれる。実際のデートについては、デートの頻度は週に1回、もしくは月に2から3回で、場所は下校時一緒に帰る(平日の場合)、ショッピング、街をブラブラ、公園、遊園地、映画館、彼の部屋・家、ファストフー

ド店などで、服装はいつもより女のこらしさやエレガントさを加えるなどと回答される。年を経るごとに彼の部屋・家が上位にくる（1989：28、1990：40、1991：46、1994：81、1996：20-21）、1995年以降の「女のコ白書」ではセックスに関する記述が減少する。その代わりに1997年の「女のコ白書」はデートのあり方について事細かな内容を掲載する。平均値などが示され、デートのマニュアル、普遍的なデートのあり方が示されているといえる（1997：59-64）⁹⁾。

「別れや失恋」については、つきあって1ヶ月目以内で別れるコが2割ほどで一番多いこと、1ヶ月から3ヶ月目までが別れの危機であり、それ以上の期間であっても半年くらいからマンネリ化すること、また別れた理由はなんとなく「自然消滅」が3割で一番多く、次いで自分・相手に好きな人ができるなどがあげられ、そのほかには、つきあってみたら彼氏の性格が変わる、もしくは彼氏の性格が予想と違ったため「イヤになる」などがあげられている（1989：28-29、1990：40-41）。「失恋」については、「女のコ白書」のなかで失恋特集が生まれ、そこでは、「涙の数だけ大人になれる つらいつらいも恋のうち」「楽しいことばかりが恋じゃない」「せつなかつたり、悲しかったりする方が多いのかも」「恋の涙はいつか出会う本当の誰かのためにあるんだよきっと」などと、失恋をポジティブにとらえるように促す記載がされたり（1993：32-33）、そのほかには「これまでの失恋経験」が平均「1.4回」だと紹介されたりしている（1994：80）。

b. 性愛経験についての記述

次に、「キス」「セックス」などの性愛経験に関わる記述をみていく。桑原（2014）で明らかにしているように、『SEVENTEEN』は「キス」を「A」と「セックス」「性交」を「C」と、定義は曖昧であるが「A」と「C」の間にあるペッティングなどを「B」と表記している。この「A」「B」「C」に共通していえることは、「はじめての相手は誰か」という質問のほとんどが「彼氏」だと回答されていることである。「女のコ白書」では毎回のように「ABCの適齢期」についての質問がなされ、その回答はほとんどが「A」は約16歳、「B」は約17歳、「C」は約18歳が適齢期であるとされる（1988：43、1989：29-30、1990：42）¹⁰⁾。

まず、「キス」、「A」についてみる。「ファーストキス」については、経験済みの「女のコ」は1988年が「26%」、1993年が「43.8%」だと、経験時の年齢が1989年では高校2年生が「経験のピーク」と、1994年では「ほとんどのコが14歳で経験済み」と記載されている（1988：57、1989：29、1993：72、1994：82）。年を経るごとに経験率は上昇して、年齢は低年齢化していることが示されている。

交際中の「キス」の状況について「つきあいはじめてどれくらいでキスしたか」という質問には2ヶ月、1ヶ月、2週間くらいが上位だとされている。「どんな日か」は夏・冬休み中、クリスマスが上位で、場所は彼氏の部屋が「ほとんど」「1位」で、きっかけは「大半のコたちがキスの前に『好きだよ』というセリフをもらっている」など「甘い言葉」をかけられてから、もしくは

「いきなり」「突然」が「ほとんど」だとされる。キスの感想についての質問もあり、キスの感触は「マシュマロ」、キスの味は「ガム」（ミントなど）の味だと、お口の上においを気にしてガムを噛む、歯を磨いているコが多いと示される。キスした後は気持ちが「HAPPY」になる、外見、内面がよい方向に変わるなどポジティブな感想が目立つ。キスをする理想の場所は「イルミネーションの下」「夜の遊園地」「東京ディズニーランド」、思い出に残るのは「映画館の中」「花火大会」「海」などだ（1988：57-58、1989：30、1990：42、1991：48、1992：56-57、1993：72-73、1995：95）。

「セックス」については、第一に「B」の経験に関する記述をみる。「B」は「A」つまりキスと「C」と比較すると記述が少ない。「B」をしたことあるコは1988年から1990年が1から2割で、1993年が「28.5%」で少数派である（1988：30、1990：42、1992：58、1993：73）。「A」から「B」に進まないコは「まだ早い」が4割、「こわい」が2割であるとされる（1988：57）。「B」をしたのは、つきあいはじめて2ヶ月、1ヶ月、2週間くらいが上位であり、場所は「彼の部屋」「公園」などと記述される。「B」は、キスの最中に胸を触られたら「B」であると示されるものの、「女の口白書」においては内容の定義は明確ではない。

第二に、「C」「エッチ」と表記される「セックス」の経験に関する記述をみる¹¹⁾。「B」よりもさらに「Cをしたことあるコ」は少数派であることが示される。「A」と同様に年を経るごとに経験率は上昇しており、1988年、1989年、1990年では6%前後だと1992年では13%前後だとされる。年齢についてみると1989年は「高2」が1位だと、1994年は「15歳」だとされる。また、「BからCにすすめない」理由として「妊娠がコワイ・心配」などが上位に、「コワイ」から、「痛いのがコワイ」といった未知ゆえの恐怖などがあげられている（1988：58、1989：31、1989：30-31、1990：43、1992：58、1993：73-74、1994：82）。

「ファーストC」（「はじめてのエッチ」とも表記される、以下「初C」と略）、つまりはじめて性交を経験した状況の記述についてみると次のようになる。「初C」の場所は5から6割近くが彼の部屋と、次いで3から4割がラブホテルだとされ、1988年の記事に「彼の部屋に行くときは要注意よ」と啓発する編集者の言葉と一緒に記述されているのが印象深い。1993年には理想の場所として「東京ディズニーランド」や「高級ホテル」が記されている。また「初C」をした日は夏休み、クリスマス、彼の誕生日が上位だとされ、「初C」のきっかけは特別なデートの日に、特別な場所にいったときなどもある。1988年の記事では「C」のきっかけが「彼がしたいと言ったから」という理由の場合、編集者の意見として「そんなんでいいの」「簡単なきっかけでCしちゃったコ40%ガビーン」と示される一方、翌年の1989年では「彼の部屋で（略）いろいろ話していたらなんとなくいつもと違う雰囲気になってきて……最後まで」という回答に対して、「というのがホトンドよ。ホッ」という意見が示される。「雰囲気で流されて」性交することへの評価は統一されていないようだ。交際中の彼氏と交際してどれくらいではじめて「C」をしたのかについて

は、つきあって3ヶ月くらい、1ヶ月くらい、半年くらいが上位だと示される。「初C」の感想はランキング形式ではなく感想が記述され、「ダントツで痛い」など痛みの感想は毎回登場する。また、ベッドで「愛しているよ」、「大切にするよ」といわれてうれしかったとある。「ファーストCのあと、ふたりの関係に何か変化はあったか」という質問には、より愛情が深まった、嫌になった、気まづくなったとプラス面もマイナス面もあることが記されている（1988：58、1989：31、1990：43、1991：49、1992：58-59、1993：74-75）。

2. 女子中高生の恋愛経験・性愛経験の構図

a. 出会いから交際までのプロセス

以上のような「女の告白書」が提示した恋愛経験と性愛経験の特徴を整理すると、1988年から1997年の『SEVENTEEN』が読者たちに提示した異性愛のあり方の構図がみえてくる。図1はそのマニュアル化された「正しい」異性愛関係のあり方の構図を恋愛のプロセスの順に図示したものである。III.1.でみてきたように、「女の告白書」において恋愛経験者、性愛経験者の割合が調査結果として示される。その経験者の割合は恋愛、性愛のプロセスについては親密度が増すほどに、性愛関係が深まるほどに経験者が減少する構図となっている。

「出会い」から「アプローチ」までを分析すると、同じ学校の「やさしくて頼りになる」男子に片思いしているという女子中高生像がステレオタイプとして示されていることがわかる。恋愛の対象は同じ学校（中学校が同じも含まれる）の男子である。大多数の女子中高生は「好きな子がいるが片思いである」ことが何度も提示される。

「女の告白書」で提示される女子中高生像は、大多数が「彼氏がいると楽しそう」という理由から「彼氏をもつこと」への憧れをもっており、恋人がいないことをさみしいと感じているというものである。しかしながら、半数が男性と交際した経験がなく、なかにはタレントに片思いし、それで満足しているのも女子中高生像のひとつの特徴である。片思い中である女子中高生たちとして、相手にアプローチをしたくても緊張して話すことができない姿が描かれ、理想はあるが消極的な女子中高生像が浮かび上がる。

ここで示される理想の彼氏像は、やさしくて、頼りになり自分の悩みをなんでも相談でき、悲しいときは励まし、なぐさめてくれる男子であり、女たらしで「エッチ」ではない男子である。ただし、みたくはおしゃれな男子である。

「女の告白書」では少数派ではあるが、「彼氏がいるコ」、「両思いになれたコ」といった交際経験をもつ読者の語りによって、理想的なおつきあいの方法が提示される。つまり、恋愛の成功者による恋愛マニュアルが提示されるのだ。男女交際の典型例は、まず、彼氏が欲しければ、自分の気持ちに素直になって、いつも積極的に話しかけるほうがよいという構図である。彼女たちは勇気を出して積極的に告白して交際に至った成功者である。しかしながら、より理想的な「つき

「あうきっかけ」は相手から告白されることである。

大多数のコ

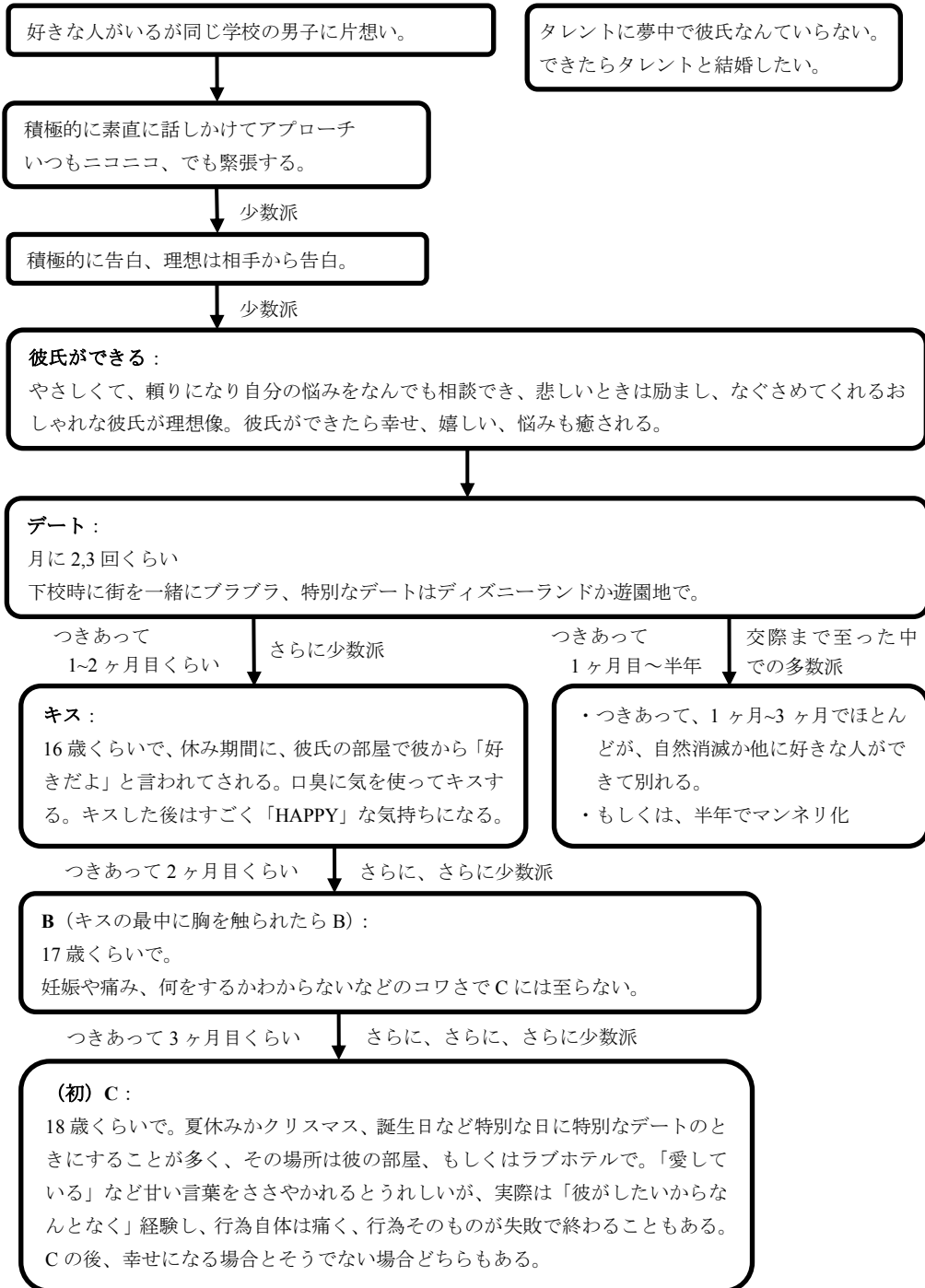


図1. 『SEVENTEEN』「女の告白書」における女子中高生の恋愛経験・性愛経験の構図

つぎに、実際の「おつきあい」の方法の構図についてみる。いつものデートコースは登下校時の通学路、公園、街をふたりでブラブラ、ショッピング、彼氏の部屋が典型例として示される。さらに特別なデートで「彼に連れて行ってほしい」場所はディズニーランド、遊園地、海である。デートの回数は少なくとも月に2から3回は実施することが典型とされる。さらには、記念日や誕生日などに行われる特別なデートではプレゼントに指輪をもらうという構図がある。

b. 性愛経験のプロセス

男女交際までこぎつけた「女のコ」たちにとって1ヶ月目、3ヶ月目が別れの危機である。つきあってみて、相手の性格が自分の思った通りでなく、なんとなく自然消滅するか、どちらかに他に好きな人ができて別れる場合がほとんど、もし半年くらいつきあったとしてもマンネリ化して別れるという構図がある。したがって、「女の告白書」ではさらに少数の読者によって交際相手との性愛経験が語られることになる。また、経験はしていないものの、理想的な性愛経験についても語られている。この点については桑原(2014)に詳しいため、ここでは性愛経験の構図だけを示す。

まず、「キス」、「A」についてである。読者は16歳が「初キス」の適齢期だとみなしている。しかし、経験者の語りでは14歳から15歳に経験済みであることが示される。経験者の語りをまとめると、キスに関わる語りの構図は、彼氏とつきあって1ヶ月から2ヶ月目くらいで、時期は夏休みなどの長期休みに、彼氏の部屋で彼から「好きだよ」と言われてされるというものである。「でも、口臭が気になる」ので歯磨きとガムで準備はしっかりするという。キスの感触はマシュマロのようなものであり、キスをした後はすごく「HAPPY」な気持ちになるという構図だ。

つぎに、「B」についてである。「Bをしたことあるコ」はキス経験者よりもさらに少数派である。その適齢期は17歳くらいであり、経験するタイミングは彼氏とつきあいはじめて2ヶ月目くらいである。「A」経験者のほとんどが「Bはまだ早い」と思いとどまっていることが示される。また、「B」経験者からは「C」に至れない戸惑いが語られる。その理由は妊娠や痛み、何をするかわからないなどのコワさである。

次に、さらに少数派である「Cをしたことあるコ」についての経験の構図である。「C」の適齢期は18歳だとされる。「初C」経験の語りをまとめると、つきあいはじめて3ヶ月目くらいの夏休みかクリスマス、誕生日など特別な日に特別なデートのときに経験することが多く、その場所は彼の部屋がほとんどという構図である。したがって、「彼氏の部屋」は「C」を経験してしまうかもしれない場所と位置づけられる。その場所で「彼がしたいからなんとなくした」というきっかけで「初C」を経験する。「初C」の感想は「愛している」といわれてうれしいが、痛い、失敗だとマイナスな側面もある。また彼氏との仲が深まる場合と、そうでない場合があるという構図である。

IV. 考察

本稿では1988年から1997年の『SEVENTEEN』「女のコ白書」の言説分析から、ティーンズ誌が提示したステレオタイプを明らかにした。それは、恋愛が日常に必要な女子中高生像、やさしい「彼氏」と週に1度は下校時や「彼氏の部屋」でデートする交際のあり方、そして、異性と交際するなかで適当なタイミングで、適齢で段階的に性愛経験を経るプロセスであった。

「女のコ白書」には片思い、両思いに限らず同じ学校に好きな「男のコ」がいることがあたり前であるような女子中高生像が登場する。読者ら「みんな」が「好きな人と両思いになる」という欲望を抱えていること、同時に「彼氏がないこと／できないこと」が悩みであることが語られる。これに対して、両思いになって「彼氏ができる」ことは、大きな幸福感と優越感を得ることだと語られる。つまり、日常に恋愛がないと普通じゃない、「彼氏」がいなくて幸福になれない女子中高生像がステレオタイプ化されることで、ティーンズ誌によって「皆結婚社会」と同じような「皆恋愛社会」が構築されるのである。

また、「女のコ白書」では、やさしくて頼りになってなんでも悩みを聞いてくれる彼氏と週に1度か少なくとも月に2回は下校時に一緒に帰ったり、「彼氏の部屋」でデートをしたりする交際が「普通」「標準」とであるとされる。さらに、「女のコ白書」は、デートなどの交際期間を経てからのタイミングで、何歳くらいでキス、セックスを経験すればよいのか、経験率は何割か、読者はキスやセックスの適齢期を何歳に位置づけているのかを繰り返し提示する。そのような交際期間を経て、つきあって1ヶ月目に14歳から16歳くらいであれば「初キス」をして、つきあって2ヶ月目に16歳から17歳くらいであれば「初B」を行い、妊娠の心配や身体的痛みにおびえながらも、つきあって3ヶ月目に16歳から18歳くらいであれば「初C」を行うという性愛経験のプロセスが語られている。数値、割合、順位づけという方法がとられることで、恋愛経験や性愛経験にはある一定のタイミングや指標があることを読者に示しているのである。このように、はじめてのキスやセックスの「適齢期」や読者の経験年齢が標準とされると、「結婚適齢期」と同じように、そのタイミングを逃すと「おくられている」という感覚を読者に与えるのではないだろうか。

「女のコ白書」において恋愛経験者、性愛経験者の割合が調査結果として示されることで、これらの経験は一般化される。同時に割合が少ない経験者たちは特殊化される。しかしながら、特殊化されたとしても、キスやセックスを経験した少数派の「女のコ」たちの語りは、未経験者に対してセックスにいたるまでのマニュアルや典型を示しているといえるだろう。そのマニュアルは少数派の経験であっても、「女のコ白書」はその経験のあり方を細分化して割合や数値を示している。たとえば、彼氏とはじめてセックスをした場所はどこか、どういうきっかけでそうなったのかなどの質問の回答が順位で示されている。「女のコ白書」の言説のなかで、恋愛経験や性愛経験の典型と特殊が、さらに特殊のなかの典型が常に提示され続け、それが基準となり、読者に対して性愛経験や理想や規範を提示しているのである。

さらに、「女の告白書」で語られる欲望は、彼氏と交際に至ることをその到達点としない。ここで語られる理想をみると、「彼氏」ができた後も欲望は肥大化していくことがわかる。この肥大化する欲望とは、記念日や誕生日など「特別な日」に、ディズニーランドなどの「特別な場所」へ「彼氏に連れて行ってもらって」、「特別なデート」をして、指輪などの「特別なプレゼント」を彼氏からもらうというものである。同じ学校の「男のコ」たちにその欲望を求めているのであれば、「男のコ」はどれくらいアルバイトをしなければならないのだろうか。しかも、「男のコ」はそれほどまでに尽力した上に、さらに、「なんでも悩みにのってくれ」と理想の彼氏として認められないのである。

本稿では短期間の、しかも、おもに「女の告白書」という読者調査を娯楽化した特集に分析の対象を限定したため、ティーンズ誌が表出する恋愛経験と性愛経験の構図の全体像とその変容にまで触れることができなかった。性愛経験に関わる記事が減少する1990年代末のティーンズ誌は、「デート」の記述のように恋愛経験のあり方のマニュアルを細分化して提示していた可能性がある。実際に、性愛経験について詳しく語らなくなったティーンズ誌は、その後「モテテク」といったキーワードを使用して恋愛特集を組むようになる。そこでは、異性に好かれるための行為や容姿について、表情、目線などの仕草、どのようなタイミングでどのような言葉を発するか、どのようなメールを送るのかなど、こと細かくマニュアル化された恋愛テクニックが語られている。このような恋愛や性愛における女子中高生の精神と身体のあり方を管理、統制し、細かい部分に至るまで標準化していくプロセスを、本稿で分析した前後の期間を含めたティーンズ誌の恋愛言説の分析によって明らかにすることができるのではないだろうか。以上の残された課題については、また稿を改めて論じていくことにしたい。

[注]

- 1) 小山らは『セクシュアリティの戦後史』(2014)において、特に性愛や恋愛の問題に焦点を当て、戦後の異性愛、同性愛に関するイメージの成立、マンガ・雑誌などのメディアにおける性の表象を考察しながら、セクシュアリティの形成の解明を目指している(小山 2014: 2-4)。
- 2) 今田(2014)によると、『女学生の友』は、それまで女学生同士の親密な関係である「エス」に関する記事、職業獲得に関する記事を排除し、男女交際に関する記事を増加させていた。異性愛の導入が促進された背景には、男女共学体制によって異性とどのようにしてつきあっていいのかにとまどう読者たちの「熱望」があった。「明るい男女交際」は、①男子の女子への理解が高まることで、男子が女子に協力するようになるため、②男子によって女子の人格向上と優れた友情がもたらされるためという2点が、女子にとって大きな利益になると宣伝されていた。また、男子の人格と男子同士の友情が女子のそれよりも優れているため、②のような利益が提示されたという(今田 2014: 73-74)。
- 3) 桑原によると『SEVENTEEN』では、創刊当初の1968年から1979年には、初体験を許すほど「愛している」相手に「けがれ」のない身体を「ささげる」ことが理想化されていた。1982年から1987年になると、

- 少女たちの妊娠リスクがより現実味の増した問題として提示されると同時に、避妊の重要性や「男のコ」による避妊への配慮が提示される。1987 から 1994 年には、初体験時に生じる身体的な痛みが語られ、少女たちはこの苦痛を受け入れなければ恋人との間に強い情緒的絆を形成できないという規範が形成されていた（桑原 2014）。
- 4) 『SEVENTEEN』は『週刊 セブンティーン』として創刊されたが、1987 年 12 月に月 2 回刊に発行形態を変更し、ロゴも『SEVENTEEN』と一新した。2008 年 9 月から月 1 回の月刊誌となり、ロゴは『Seventeen』に変更。2015 年 9 月号で通巻 1531 巻となる。
 - 5) 「普通さ」や「基準」の提示についてみると、たとえば、1992 年の「女のコ白書」には、「17 歳女子高生たいらひとしこ平均子の『あるある』！一日——発表！日本のフツウの女子高生の生活はこんなだった」と題する記事がある。その記事の趣旨は「アンケート結果をもとに、平均的な女子高生、その名も平均子！の一日をフォトマンガで再現。「私の一日と同じ！」と喜んでもらえることうけあい」と説明されている（1992：26-31）。ほかにも、1993 年の「女のコ白書」では「あなたのふつう度がわかる問題集 平凡ドリル」と題する記事がある。記事タイトルのすぐ下には、「女のコ 10000 人のアンケートをもとに“平凡度”がズバリわかるテストを作っちゃったよ。もしあなたがふつうの人なら、問題なんて超簡単！百点満点まちがいナシ!! さあ、あなたは人並みか、変人か!?!」と記載されている（1993：47-50）。
 - 6) 谷本は《主題的モチーフ》を、「恋愛の進展していく順番に並べて、その図式を恋愛物語の構造」（谷本 2008：27-28）とみなして考察している。ただし、谷本はこの《主題的モチーフ》の連鎖を社会的物語として捉え、その割合や内容の変化を 1970 年代、1990 年代、2000 年代にわけて分析している。本稿は 1988 年から 1997 年の 10 年間のみの分析であり、恋愛、性愛言説が大きく変化しているのかを明らかにすることができない。また、その言説の表出率を分析していくことが目的ではない。谷本は上記の分析のために、記事内容をそれぞれ恋愛行動に分類した。その際に「筆者の独断を防ぐため、数人の研究グループによって」作業する方法を用いていた（谷本 2008：42）。本稿が分析する「女のコ白書」の記事の小見出しは Q & A 方式で提示され、その語りを見ると、「好きな人はいますか？それは片思い？」、「男のコと平気で話ができちゃう？」、「男のコの好きなどころと、きらいなどころは？」、「いま、好きな男の子がいますか」などのように、「白書」記事の特質上すでに恋愛のプロセスの《主題的モチーフ》ごとに編集されていた。したがって、谷本の用いた方法で分析を進める必要がなかった。
 - 7) ただし、谷本（2008）はこの《主題的モチーフ》の連鎖を社会的物語として捉え、その割合や内容の変化を 1970 年代、1990 年代、2000 年代にわけて分析し、変化した記事の違いに着目している。本稿では、具体的な記事内容において各恋愛プロセスの理想的なあり方をとらえることが重要なため、理想の提示を整理する際に、谷本の《主題的モチーフ》を参考にしながら提示する。
 - 8) 告白の方法は 1 位が「直接」、2 位が「手紙」だと記されている（1993：31）。ただし、手紙についてはラブレターを出した経験については「No」が「76.5%」であり「もはやラブレターは衰退しつつある」とある（1994：81）。「手紙」が告白の典型だと位置づけていたわけではない。
 - 9) たとえば、「待ち合わせはどこですることが多い？」の 1 位は「ふたりの共通の地元駅」、「カレが来た！なんてあいさつする？」の 1 位は「おはよう」、「ふたりでどうやって歩くの？」の 1 位は「手をつなぐ」、「みんなはお昼、何食べてる？」の 1 位は「ファストフード」、「デート 1 回の平均予算はいくら？」の平均は 1 人あたり「3,155 円」、「帰るとき、カレはどこまで送ってくれる？」では「45%のコが家の近所まで送ってもらう」といったようにデートのプロセスについて詳細に記述される（1997：59-64）。
 - 10) ただし、1994 年以降の「女のコ白書」では「B」「C」ではなく「H」「エッチ」と表記されており、「B」

「C」という区別がなされていない。

11) 「C」「エッチ」に関する質問項目は毎回 10 個以上記述されており、1993 年が一番多く「エッチ」に関する質問項目に 4 ページも割かれている。1989 年と 1994 年以外は「女のコ白書」内で 2 ページであった。

引用文献

赤枝香奈子・今田絵里香：「あとがき」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』（京都大学学術出版会，2014）：333-336。

赤川学：『セクシュアリティの歴史社会学』（勁草書房，1999）。

今田絵里香：「異性愛文化としての少女雑誌文化の誕生」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』（京都大学学術出版会，2014）57-77。

北原みのり：『アンアンのおしゃべりな女性になれた？』（朝日新聞出版社，2011）。

黒田浩一郎：「看護婦から見た臨死患者」『医療と人間観』（生命科学振興会，1989）65-72。

黒田浩一郎：「看護婦からみた臨死患者—『死の看護事例集』にみる看護婦の臨死患者とその家族に対する期待と現実」『神戸女学院大学 論集』37, No.2 (1990) 113-135。

桑原桃音：「1970～90 年代の『セブンティーン』にみる女子中高生の性愛表象の変容」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』（京都大学学術出版会，2014）245-265。

小山静子：「純潔教育の登場—男女共学と男女交際」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』（京都大学学術出版会 2014）15-34。

小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編：『セクシュアリティの戦後史』（京都大学学術出版会 2014）。

集英社社史編纂室編：『集英社 70 年の歴史』（集英社，1997）。

SEVENTEEN 編集部：『女のコ白書最新版』（集英社，1990）。

総務省統計局：「25-12 就学率及び進学率（昭和 23 年～平成 17 年）」文部科学省生涯学習政策局『文部科学統計要覧』<http://www.stat.go.jp/data/chouki/25.htm>，（2006）2015 年 6 月 10 日取得。

谷本奈穂：『恋愛の社会学—「遊び」とロマンティック・ラブの変容』（青弓社，2008）。

日本性教育協会：『「若者の性」白書—第 6 回青少年の性行動全国調査報告』（小学館，2007）。

マシマ，トジラカーン：「楽しむものとしての“性”はいかにしてもたらされたのか—1970～1980 年代の『少女コミック』の場合」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』（京都大学学術出版会，2014）267-287。

諸橋泰樹：『ジェンダーの罫—とらわれの女と男』（批評社，2001）。

米澤泉：『私に萌える女たち』（講談社，2010）。

[付記] 本稿は、2010 年から 2012 年度 京都大学グローバル COE プログラムコア「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」（共同研究「戦後日本におけるセクシュアリティと親密性の再編」）の補助金による研究成果の一部である。